

二

次の文章は、二十代後半の「梨々子」がひとりりで引越しの荷造りをしている場面から始まる文章である。これを読んで、後の一から十二の各問いに答えなさい。(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

いる、いない、いる、いない、いる。

荷造りを進めながら、いろいろなものをゴミ袋に詰めていく。

手に取ったのは、そう大きくもないのにずしりと重い包みだった。

「*筒石さんね」

声を出してみても①特別な感情は起きなかった。既に遠く離れてしま

ったものを思い出すような感じだ。その代わりに、この包みをもら

ったときの抑揚のない空と、銀杏の葉っぱから漏れる光と、無邪気に

母を見上げていた*潤の大きな黒い瞳が思い浮かんだ。

「これが全部埋まるまでには戻ってこられるわよ」

筒石さんはそう言った。潤の通う幼稚園の園庭を並んで歩いていた。

意味がわからず、包みを受けとったままの木の陰で梨々子は軽く首

を傾げた。

「*お餞別。受け取ってちょうだい。これ、日記帳なの」

「え」

「分厚いでしょ。十年分書けるのよ」

②筒石さんがニヤリと笑ったように見え、梨々子はますます戸惑った。

(中略)筒石さんは梨々子に「嫌なことがあったときは、書くときりするから」と言いながら日記帳を渡したのだが、受け取った梨々子の方は「のどかな午後、大きな銀杏の木漏れ日の下で向かい合っていないが、すでにこの人に、これからもこの幼稚園にいることのできる人たちに、自分たち親子は切り捨てられている」と、ある種の孤独感を得てしまう。その後、梨々子は引越しを終え、田舎の新居で荷物の段ボールを開け、日記帳を手にする。

(A)無邪気に贈られた日記帳であるはずがなかった。筒石さんが今頃舌を出しているだろうと思うと腹立たしい。彼女はご丁寧にも、これが全部埋まるまでには戻れるだろうと言ったのだった。あんまり失礼だ。戻れるって何。それじゃまるでうちが島流しにでもなったみたいじゃないの。

梨々子はジノリのマグカップにティーバッグを入れ、沸いたばかりの薬罐の湯を注ぐ。それからローボードから日記帳を取ってきて、テーブルの上で開いた。

十キロ、と人には言っているけれど、ほんとうは十五キロだ。*彼は十五キロ痩せなければ出会った頃の彼ではない。生え際も少し後退したかしらん。

③そこまで書いて読み返し、梨々子は鉛筆を放り投げる。テーブルの上で鉛筆の転がる、からんと乾いた音がした。一日分の欄は狭く、あと一行も書けるかどうか。

問題は文章の量ではない。もしかしたら、質でさえない。記念すべき第一日の欄に自分自身について書くことを何ひとつ思いつかないのはなぜなんだろう。

それでも何か書かなければ、と思う。梨々子が思い出していたのはロビンソン・クルーソーだ。たしか彼は漂着した無人島の洞窟に一日ずつ正の字を書いていったのではなかったか。日付を確認するためというより、それを唯一の心の拠り所として。圧倒的な孤独の中で正気を保つために。

何か、鍵を。錆びついた真鍮の鍵でも、プラスチックの玩具の鍵でもいい。ここからどこかへつながるドアを開けたい。そのため鍵となるようなものがほしい。

マグカップに入れっぱなしになっていたティーバッグを思い出し、キッチンへ戻る。籠甲色になった紅茶をひとくち飲んで、べへ、と口を歪める。苦くてまずかった。

「日本人じゃないんだから」

梨々子は開いた日記帳の前へ戻る。ロビンソン・クルーソーは正の字は書かなかっただろう。

もしもここにドアがあつて、鍵があつて、さあ開けてごらん、と言われたとしても、開ける勇気があるだろうか。どこに行きたいのかもわからないままで。鍵よりもドアを探すほうが先なんじゃないか。

④ 胸の奥でぶくぶくと疑問が浮かんだが、気づかないふりをした。ここでないならどこでもいい。私は普通に東京で暮らしていたかっただけだ。梨々子は考える。考えるふりをして考えない。考えないようにして考える。私は東京で暮らしていたかった、のに、家庭の事情で田舎に引越すことを余儀なくされた、から、憤っている、ふりをしていなければならない、実のところ、ほっとしている、とも思う。認めたくはない、けれど、強引に連れてこられて、未来の設計を狂わされ

て、ほっとしている。なぜなら、未来の設計など、はじめから、なかったのだから。

⑤ いま美しいこと、この上なし。

梨々子は鉛筆を持ち直し、そのいま美しい日記帳に乱暴に書きつける。筒石さんの名前も、いま美しい状況の経緯も省いて。⑥ 梨々子は島流しになつて岬で足を摺っている。月が都と同じだと言つては空を見上げて涙する。たしかにその通りだと認めるのはあまりにも悔しい。

それから、改行して、

かすり。

と足す。それ以上の説明はつけなかった。⑦ 後で、たとえば一年後の今日、二年後の今日、この欄を読み返したときに、自分がどんな気持ちでいたかなんてよいに思い出されては困る。ライバル心というのだろうか。未来の自分に見栄を張っている。今、自分が泣くに泣けない乾いた場所にいることを一年後の自分に思い出されたくない。私はいつも上手に(B)きれいに私を生きている。そう思いたかつたし、半分開らいはそう信じてもいる。そうではなかったのだと後になつてわかるような痕跡をここに留めるのは嫌だった。でも、まったく楽しいと書けばあまりにも嘘くさすぎて逆に白々しいのではないか。考えた末、⑧ かすり、とひとことだけ残すことにした。

未来の私は、この単語を見て今の私の気持ちを正確に思い出すことができるだろうか。もちろん、簡単に思い出してほしくないからわざとわかりにくくしか書かないのだが、すっかり思い出されないという

のもやはり少し残念な気がする。いつも私の人生はかすっている、と梨々子が思っていることを来年の梨々子が思い出さないわけはないのだが。

いつそれを意識したのだったか。十歳の頃にはすでもしかして私は王道をかすっているだけなんじゃないかと動揺した記憶がはつきりとあるのだから、少なくともそれから二十年近くどこかで気にしていたことになる。

その昔、梨々子は自分が女の子の王道を歩んでいると思っていた。学校でいちばんにはなれなくても、クラスでいちばんかその次くらいにはかわいくて、お洒落で、人気者。そこそこ勉強も運動もできるけど、気取らず、先生のウケもいい。でも――。

⑨それが、どうした。

あるとき、声が聞こえてしまった。それまで王道を歩んでいると信じていた自分が、まるでケン・ケン・パでもするみたいに、イケてる自分、かすってる自分、と二つの集合に片足跳びで出入り入ったりしている。かすってるほうの集合に着地しているときよりも、イケてるときのほうがよく聞こえた。それが、どうした。それが、どうした。自分の声だった。声が聞こえると、すべて引つ繰り返されたような気持ちになった。自分がどちらの集合にいたいのか、それともずっと他の集合を探したいのか、わからなくなった。

達郎と出会ってつきあいはじめてからも、⑩両方から同時に引つ張られて軸足がふらふらすることがよくあった。当時の梨々子は達郎に夢中で、達郎によく見られたくて、必死だった。でも、その「よく」見られるというのが具体的にはどう見られたいということなのか、つまりは自分がどうありたいのか、何に必死になればいいのか、どんなわからなくなっていた。

どまんなかだったことは一度もない。それだけはたしかだった。い

つもいつも、思っていたところをかすって、少しずれていて、なんだか違う、望んだものはこれじゃない、と思いつながら、ではどういふものを望んでいたのか、そもそも望んでいたものなどあったのかと心許なくなってしまう。

今もそうだ。私はどんな生活を望んでいたのか、王道の王とは誰のことなのか、わからなくて、梨々子は考えるのをやめてしまう。寝室から歩人の泣く声が聞こえる。二時間ごとの授乳は物事を考えるのを中断するのにもってこいだ。

〔注〕

* 筒石さん＝潤の通う幼稚園に子供を通わせる保護者。梨々子と親しくしている。

* 潤＝幼稚園に通う梨々子の息子。弟は「歩人」である。

* お銭別＝遠くに行く人に別れのしるしとして贈る金品。

* 彼＝梨々子の夫。後に出てくる「達郎」と同じ。

* 余儀なくされた＝強いられた。

問一

――線(A)「舌を出している」・(B)「きれいに」の言葉の本文中の意味として最も適当なものを後のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

(A)「舌を出している」

ア 馬鹿にしている イ 得意そうにしている

ウ 責め立てている エ 否定している

オ うわさしている

(B)「きれいに」

ア 大局に立って イ 非の打ちどころなく

ウ したたかに エ しなやかに

オ 角を立てず

問二

――線①「特別な感情は起きなかった」とありますが、梨々子

に特別な感情が起きなかったのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 東京で暮らしたいという感情がそもそもなかったため、筒石さんのことを思ってもそこから湧きあがるものもないから。

イ まだ東京にいるにも拘らず、すでに自分とは関わりのない違う世界の人のように筒石さんを感じてしまっていたから。

ウ それほど親しくなかった筒石さんに対しては、名前を声に出してみても惜別の情がにわかには湧かなかったから。

エ 筒石さんとは仲がそれほど良いというわけではなかったため、筒石さんに対して感謝する気持ちが出なかつたから。

オ 東京の幼稚園に子供を通わせられないことを考えると、ずっと東京にいたことのできる筒石さんが羨ましかつたから。

問三

——線②「筒石さんがニヤリと笑つたように見え、梨々子はますます戸惑つた」とありますが、ここでの梨々子の心情はどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の心を害さないようにどう反応すべきか迷う一方で、東京と地方との文化的な優劣を前提に梨々子が見下されているようにもあり困っている。

イ 十年分書けるという言葉に含まれている嫌味がわからず、そのときニヤリとされたこともあつて、どう日記を受け取つていいかわからずにいる。

ウ 渡されたものの意味も、どう対応していいかわからない上、惜別の念とはどこかずれた言動に筒石さんの真意をはかりかねている。

エ 日記が別れを惜しむ意図からでなく、実は東京から離れる梨々子に対し優越感を抱くために贈られたのではないかと疑つ

ている。

オ 餞別としてもらつた日記に対しその意図をうとましく思い、その日記が十年分書くだけの分量があることに對してもうとましく感じている。

問四

——線③「そこまで書いて読み返し、梨々子は鉛筆を放り投げる」とありますが、ここでの梨々子の心情はどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 記念すべき一日目の欄に自分でなく夫のことを書いてしまつたが、かといつて自分自身を見つめると書くべきことなど何もないような気がして、自分自身が嫌になつた。

イ 引越先での出来事を書くとしたが、出てくることは地方への予期せぬ引越しを自分自身にもたらしただに對する恨み辛みだけで、なぜやりの気持ちになつた。

ウ 夫のことでなく自分が今田舎にいていかに孤独な思いであるか、どんなに辛く思っているかを詳しく書くかう思つていたのに書けなくて、物足りなく思っている。

エ 圧倒的な孤独の中で正気を保とうとして書き連ねた言葉が夫への不満を隠す自分自身の浅ましきだつたことに気づき、内面を素直に表せない自分自身に怒っている。

オ 一日分の欄はそれほど長くない日記に、あと一行も今日のことを書けるかどうかからなくなつたので、もはや自分自身の内面を書くべき余白がないことを残念がつている。

問五

——線④「胸の奥でぶくぶくと疑問が浮かんだが、気づかないふりをした」とありますが、その理由を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なりたい自分を探せないのに、したいことだけは明確にもつ

自分をうとましく思ったから。

イ 自分の未来設計が漠然としてしているのも都合が悪く、その事実から目を背けたかったから。

ウ 考えの甘い自分について考えることが何となく面倒くさく思われ、どうしてもよくなったから。

エ 自分がどうしたいのかはつきりしないため、東京から田舎に行っても仕方がないと考えたから。

オ 自らの過去を振り返り、これから先同じようなことで迷いそうな自分を恥ずかしく感じたから。

問六

——線⑤「いまいいこと、この上なし」とありますが、ここで梨々子は何に對して「いまいいこと」と思っているのですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筒石さんから日記をもらったことと望まない形で東京を離れることになってしまったことに加え、田舎に来て実はほっとしていることに對して。

イ 筒石さんが東京から離れる際に饒別としてくれた日記を書く中で、自分が東京にいることにひどく執着している一面に気づいてしまったことに對して。

ウ 都会で人間関係もうまくいつているのに夫の転勤という形で東京での生活を捨てざるを得なくなり、筒石さんから日記までもらったことに對して。

エ 強引に夫に田舎に連れてこられた悔しさと、そこでの生活に不安を抱いていたことが、徐々に薄らいできてほっとしている自分があることに對して。

オ もし東京に居続ければ考える必要があった将来像を、とりあえず曖昧なままぼんやりさせておくことができてほっとしてい

ることに對して。

問七

——線⑥「梨々子は涙する」とありますが、ここでの梨々子の心情はどのようなものですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どうして東京を離れることになってしまったのかと夫を責める気持ち。

イ 田舎に来て月が東京と同じように美しいことに對し、強く感動する気持ち。

ウ 今までの人づきあいが東京を離れることでなくなってしまう残念に思う気持ち。

エ これまでの苦勞を振り返り、田舎暮らしができることをうれしく思う気持ち。

オ 東京から離れた場所からもいた東京を懐かしむ、憂いを含んだ気持ち。

問八

——線⑦「後で思い出されては困る」とありますが、そのように梨々子が考えるのはなぜですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今の自分の惨めさを受け入れる障害になると感じたから。

イ 田舎暮らしを悔やんでいる今の自分も悪くないと思いたくなかったから。

ウ 未来の自分に惨めな状況にいる今の自分を示したくなかったから。

エ 日記を読み返す未来の自分に良きライバルと思われたかったから。

問九

——線⑧「かすり、とひとことだけ残すことにした」とありますが、そのように梨々子が考えるのはなぜですか。最も適当なも

のを次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア そこそこかわいくてお洒落で、運動も勉強もでき周りからちやほやされる自分のことを日記に書き記せないのは梨々子のプライドが許さなかったが、かといって今の苦しい状況をなかつたことにしてしまうのも違うような気もしたから。

イ 引越すことの不本意さや不本意だと思ひ込むことで見てこなかつた自身の空ろさに思い至つたのは残念ではあるが、今の状況が思い出せなくなるのは不本意である。とはいえ、これらの否定的な感情を書くのもまた自分らしくないから。

ウ 引越さなければならぬことに憤るふりをし、見ようとしてこなかつた自身のうすつぺらさに気づき堪える部分もあるが、そんな自分も王道をかすつてはいる。何も書かなければこのことすら忘れてしまふだろうから。

エ 生まれてから二十数年、王道を歩んでいるかのように見えて実はかすつていただけだという自分自身の暗部に再び触れてしまったのは苦しい。しかしながらこの記憶をすべてなかつたものにしてしまうのは少し残念な気がしたから。

オ 今おかれた自分の状況を楽しんでゐるかのように書いてしまふと、実際に感じている気持ちに嘘をつくことになってしまう。一方で自分の心情をありのまま書くのは不本意だが、後から思い出せないのもまたためらわれたから。

問十

——線⑨「それが、どうした」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自信をもつて他者に接するとき聞こえてくる、いい気になるなどおごる自分に対し反省をうながす第三者からの声。

イ 他者からの評価で自分自身を評価してしまうことの困難を、

それとなく暗示するかのような梨々子自身の声。

ウ 思った通り振る舞っていると感じているときにだけ聞こえてくる、自分の不完全さを暴くかのような梨々子自身の声。

エ 他者からの評価で自分らしさを作ろうとしている梨々子に、本当にそれが自分の望む姿かと問う梨々子自身の声。

オ 他者から憧れを抱かれることに満足する自分自身を否定し、確固たる軸をもつた自分を確立せよと命じる神の声。

問十一

——線⑩「両方から同時に引張られて軸足がふらふらす」とありますが、その説明として最も適当なものを次のア、オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 女の子の王道を進んでいると思つてゐる梨々子の一面と、他者からの注目を一身に浴びることに対し「それが、どうした」と思いとどまる別の側面とのどちらが自分なのか迷つてゐるということ。

イ 梨々子の中にあるイケている自分とかすつてゐるだけの自分とが同居しどうにも身動きがとれず、バランスがとれないでゐるため、自分自身の中でバランスを何とか取るべく苦勞してゐるということ。

ウ お洒落で人気者の自分と運動も勉強もでき周りからちやほやされる自分のどちらに軸足を置けばいいか決めかねてゐる状態のまま今に至り、梨々子の中で軸足が定まっていないう状態だということ。

エ 他の人から評価され、女の子の王道を歩いていると信じてゐる自分と、その王道をかすつてゐるだけの自分という二つの自分のどちらが自分のあるべき姿なのか、梨々子自身わからなくなるということ。

オ 女の子の王道をかすつてゐるだけの一面と、他者から好奇の眼

差しを投げかけられ「それが、どうした」と反発する別の側面とが梨々子を引き裂き、自分が何者かわからなくなってしまうということ。

問十二 本文において日記はどのような役割を果たしていますか。最も

も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 隠された暗い梨々子の過去を描写し、梨々子の将来を読者にほのめかす役割。

イ 梨々子の内面に梨々子自身が気づくことで、その後の梨々子の成長を暗示する役割。

ウ 梨々子に自身の内面を見つめさせ、その中にある負の一面を認識させる役割。

エ 梨々子のもつれた内面をときほぐす場を与え、安心感を読者に与える役割。

オ 前向きに生きようとしている梨々子の人物像を読者に印象づける役割。